

命を懸けてまでも、手術をする必要はない。

65歳 男性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

本人が判断に迷っている時に心強い指針を受けた。医師とは、この様にあるべきだ。

あらゆる病気は治らない。治らぬ病とは戦わず上手に付き合っていくのが一番です。

71歳 男性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

“あらゆる病気は治らない 大病してこそ一人前”という言葉があります。治らぬ病を一生懸命に治そうとすると、よけいに苦しい思いをしたり、痛い思いをしたあげくの果て、寿命を縮める事になります。病気を治そうと思うから人は悩み苦しむので、うまく病と共存することを考え、医師には痛みや苦しい時だけを緩和してもらえばいいのです。そう考えていれば気持ちが楽になります。

確実に約束できるのは、我々スタッフは山田さんを救うために全力を尽くすということ。

50歳 男性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

手術前にさまざまなリスクの説明を受けた。最後に主治医が「なにがあるかわからないし、絶対に安全とはいえない。そんな中でこれだけは確実に約束できるのは、どんな事態になろうと、我々スタッフは山田さんを救うために全力を尽くすということ」と言われた。それで安心して手術を受けた。

まずは5年目指して頑張ろう。意地でも生きよう。5年後はきっと今より医学は進歩し、新しい薬が出ているかもしれないから。

42歳 女性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

予後不良の乳がんだったため、「3歳の息子が10歳になるまでは、先生、死ねない。生かしてください」と泣きついたときに、主治医が悩んだ末に発してくれた言葉です。この言葉は闘病中の支えになり、今でも私の大きな希望となっています。私が癌患者家族限定で、シンガーソングライターの方を招いたライブを企画したときも、主治医は駆けつけてくれ、素敵なスピーチをみんなに披露してくれました。心から尊敬し、信頼しています。

出来ない時はできない。できるようになったら考える。それまでは休養。

64歳 男性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

胃癌（ステージ4）で胃、胆嚢、脾臓の全摘出手術を受けた5日後に受診したメンタルヘルスケアでの先生のアドバイスです。いつまで生きられるか、仕事に戻れるのか、等の不安や心配。でも、今はあれこれ考えても何も出来ない。だから考えない。あまり先の事を心配してもどうなるかわからない。だから心配しない。「その日暮し」が良いとのこと。この一言で、気持ちがずいぶん楽になり、今でも「一日一日を大切に」生きています。

手術延期してじっくり考えていい。前向きに考えるための手術延期は一つの方法。その間にセカンドオピニオンを受けることもできる。

53歳 女性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

術式を決定するためのデータが複雑で、主治医自身も判断に迷うと正直に言われた。そこで主治医から僕の判断が100%正しいとは限らないから、とセカンドオピニオンを勧められた。患者が納得して治療をできるように進言してくれた医師の言葉は優しく力強く響いた。

GIST（消化管間質腫瘍）、昔は何度も手術をしたけど、今はいい飲み薬があるから、大丈夫。

46歳 女性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

H20、10/10の朝突然の吐血で、救急搬送して貰い、その日のうちに胃切の緊急手術。次の日からは3連休という日の事でした。前日迄、デイケアで准看護師として働いていました。病理の結果GIST（消化管間質腫瘍）と知らされました。20代のころは手術室勤でしたが、初めて聞く結果でした。退院してから、勤務していた内科の女医先生に「病理の結果GISTでした。」と話したところ、『GIST、昔は何度も手術をしたけど、今はいい飲み薬があるから、大丈夫。』と話してくれました。現在は、ナースを武器に、介護保険の認定調査員として働いています。内科の女医先生が施設長をしている施設にも調査に行きます。「先生、4年生存です。転移・再発しても、働いています。」と話せたらいいなと思います。きっと泣きます。

試練です。何年生きていきたいですか。前向きに、頑張りましょう。

62歳 女性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

がんと告知され、誰にも会いたくなく落ち込んでいました。主治医の先生は、1日も欠かさず朝昼夕とどんなにか忙しい中で、病室を訪れて下さいました。ある日、「試練ですよ」と一言おっしゃいました。わがままな私は申し訳なさで一杯でした。術後、「きれいに取ったよ。でも目に見えないがんは取れない」と。六年経ちました。ステージ4、転移もありましたが、元気です。忙しい中、力を尽くして下さいました先生に感謝の思いで一杯です。

頑張らなくていいんですよ。もう十分頑張ってますから。そのままいいんです。

28歳 女性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

検査結果が出て治療方針が決まった時に主治医より言われた言葉です。「頑張らなきゃ。私頑張ります。」と涙ながらに話したところ、こう言われました。こうしてもらえて更に涙が止まりませんでした。でも辛い時に、情けなく感じた時にこの言葉を思い出していました。「患者さんは皆、頑張ってます」いつもそう言ってくれ、「私、頑張ってるんだ。気張らなくていいんだ。」と思えるようになりました。

傷口を見たら「大丈夫だね」の一言が私の心にじんと来ました。（主治医の一言）

78歳 女性 《医療関係者から 患者さんご本人へ》

背景

私は、乳がんで昨年放射線治療後何度か傷口から出血し、何度か縫合したけれど傷口がふさがらず悩みました。診察のたびごと主治医と顔を合わせるのが恐ろしかった。入院し処置の結果、ようやく落ちつき10ヶ月位になります。この頃の主治医が今迄みた事のないほどかわいい顔して、傷を見たら「大丈夫だね」と云って下さったこの一言と笑顔が、私の心にじんと来て、一ヶ月一度の病院通いがたのしくなりました。先生ありがとうございます。

-
- 印刷
 - PDF

Source URL: <https://www.novartis.com/jp-ja/even-at-risk-life>

List of links present in page

- <https://www.novartis.com/jp-ja/jp-ja/even-at-risk-life>
- <https://www.novartis.com/jp-ja/jp-ja/node/14241/printable/print>
- <https://www.novartis.com/jp-ja/jp-ja/node/14241/printable/pdf>